

1940年代における梅娘ら『華文大阪毎日』 同人グループの翻訳活動

羽田朝子

奈良女子大学アジア・ジェンダー文化学研究センター 特任助教
(現 秋田大学教育文化学部 講師)

緒言

満洲国の中国人作家による文学に関する研究は、政治的な理由から日中両国で長らく顧みられてこなかったが、1980年代にアメリカの研究者E. M. Gunnによってとりあげられたことを端緒に、中国現代文学の一領域として認められるようになった。90年代以降、中国や日本でも数々の先行研究が登場し、再評価が進んでいる。こうした中、とりわけ注目されている作家が梅娘（1920～2013）である。彼女は1944年に大東亜文学賞を受賞したことから、中華人民共和国成立後に批判されて長らく文学研究の対象にされてこなかった。しかし近年では梅娘の文学に関する専論が登場し、その文学は民族主義やジェンダーの観点から高く評価されている。

梅娘は1930年代後期から40年代にかけて、満洲国の中国人作家である柳龍光（1915～48）・魯風（生卒年不明）・田瑯（1917～卒年不明）・但娣（1916～92）と、合同で翻訳活動を行っている。彼らの活動は、西洋や日本の作家の詳しい紹介文や複数の作品の翻訳をそれぞれ分担して行う系統的なもので、こうした例は当時において他に類を見ない。彼らの活動は、外部の情報を遮断された満洲国や占領下の華北の文藝界に大きく貢献したといえよう。

先行研究では、満洲国の作家について個々の活動だけを考察しており、複数の作家による合同の文学活動については検討されてこなかった。そこで本研究では、梅娘をはじめとする満洲国の中国人作家グループが合同で展開した外国文学の翻訳活動に焦点を当てた。彼らは満洲国や日本占領下の北京における代表的な雑誌であった『華文大阪毎日』（大阪毎日新聞社が発行した中国語雑誌。以下、『華毎』）において活動した作家たちであったため、本研究では「『華毎』同人グループ」と称することにした。ただし、彼らは『華毎』以外にも複数の雑誌・新聞で広く活動を行っていたことから、本研究では

他の新聞雑誌にも対象を広げた。

本研究はその内容から二段階に分かれる。まず第一段階では、『華毎』同人グループの翻訳活動の全貌を明らかにした。そして第二段階では、彼らの活動にはどんな意味があったのか、彼らが日本の厳しい思想統制下において翻訳にどんな思いを託したのか、その翻訳意図を検討した。

研究方法

まず『華毎』同人グループが合同で行った翻訳活動についての資料を、満洲国あるいは日本占領下の北京で発行されていた雑誌・新聞を広く閲覧することによって、くまなく収集した。そして彼らが翻訳の際に使用した底本を確定する作業を行った。彼らは西洋文学を翻訳する場合にも日本語の翻訳本を底本として使用しており、その底本を現書もしくは国会図書館「近代デジタルライブラリー」、「デジタル化資料」で確認し、翻訳と底本を照合する作業を行った。こうした作業を踏まえたうえで、『華毎』同人グループの翻訳活動の意図について、分析・考察を行った。

研究結果

以上の研究方法による成果として、①「『華文大阪毎日』同人們的“読書会”：満洲国作家在日本時期的欧州文学紹介」（国際シンポジウム「衆聲喧「華」：華語文学的想像共同体国際学術研討会」での発表、中国現代文学学会主催、於台湾・台北、2013）、②「梅娘ら満洲国作家たちの日本における海外文学紹介—『大同報』「海外文学專頁」を中心に」（『叙説』41号、2014）、③「梅娘的留日時期与“読書会”」（『再見梅娘』人民文学出版社、2014）において公表した。以下、その概要を記すこととする。

1. 『華毎』同人グループによる合同の翻訳活動の全貌

本研究により、まず『華毎』同人グループの翻訳活動の全貌を明らかにした。それは以下の3種の新聞雑誌における翻訳特集である。

- ①『華毎』「海外文学選輯」(5回、1940年7月15日～12月15日)
- ②『華毎』「日本現代詩選輯」(4回、1940年11月1日～12月15日)
- ③『大同報』「海外文学專頁」(29回、1940年9月4日～1941年7月6日)
- ④『中国文藝』「海外文学別輯」(4回、1940年11月1日～1941年4月)

以上の翻訳活動を見てみると、『華毎』同人グループは1940年7月から41年7月までのわずか1年の間に4系列もの翻訳特集を担当していたことがわかる。とりあげた作家は総計37名、作品数は107篇にもものぼる。その大半が西洋文学であった。彼らがこれだけの量の翻訳紹介をこなすことができた背景には、当時の日本の出版界の状況が大きく影響していた。『華毎』同人グループの翻訳活動に先駆けて、日本には空前の出版ブーム(円本ブーム)が訪れており、そのなかで数々の文学全集や選集が出版され、さらに各種の文庫本も続々と創刊されていたのである。彼らが翻訳の際に底本としたのも、多くが円本ブームのもとで出版された全集や選集、文庫本であった。当時、外部の情報が閉ざされていた満洲国では接することのできる西洋文学は限られており、『華毎』同人グループはこうした満洲国の状況を背景に、日本の翻訳本を利用して、これら文学経典の紹介に力をつくしたのだと考えられる。

2. 翻訳の意図

確かに『華毎』同人グループの第一の目的は、外国文学を翻訳紹介するという文学上の使命感に基づくものであっただろう。しかし当時日本で数多く出版されていた西洋文学の翻訳本の中から数篇の作品を選ぶにあたっては、何らかの意図も働いているはずである。本研究ではこうした翻訳意図を考察するにあたり、『華毎』同人グループが確かに特別な思い入れを持って選訳したと判断できる作品に注目した。上述したように、彼らを取り上げた作品は日本語訳が比較的手に入りやすい全集や選集に収められているか、文庫として出版されたものが多数を占めている。しかし、なかには雑誌でしか発表されていない日本語訳を選訳したものがある。それはジッド

日記を抄訳した魯風訳「一九一四年大戦日記」(『華毎』「海外文学選輯」)と、梅娘訳による日本人作家のルポルタージュ作品4篇(『大同報』「海外文学專頁」)である。当時文学全集や文庫本が豊富に存在したにもかかわらず、雑誌に一度掲載されたに過ぎない作品を選んだということは、そこに格別な思い入れがあったと推察される。そこで、以下は特にこの2つに着目して、その翻訳意図を掘り下げた。

(1) 魯風訳「一九一四年大戦日記」

この作品は第一次世界大戦時にフランスがドイツに占領された直後のジッドの日記であり、その内容からはジッドが流言蜚語に惑わされず自らの眼で戦争の現実を見極めようとする作家としての冷静な目が窺えるものであった。魯風は同じく祖国が占領されるという悲劇に見舞われた者として、作家のジッドに強く共感し、この翻訳紹介を思いついたのだと考えられる。彼は日本の厳しい統制下にあつて、翻訳という形で同じ占領下におかれたフランスの情勢を描いたのであり、ジッドの言葉を借りて満洲国や占領下の華北の同胞たちにメッセージを発信したのであろう。また、この作品が掲載された『華毎』「海外文学選輯」の欄内には、『華毎』同人グループによって海外文藝情報欄「海文展望」も掲載されていた。彼らは「海文展望」において特にドイツ占領下のヨーロッパの国々の状況や作家たちの動向を伝えており、なかにはヨーロッパの事例を借りて満洲国や占領下の華北の文化人たちにメッセージを発信したと思われる記事もあったのである。以上については、拙論「梅娘ら『華文大阪毎日』同人たちの「読書会」—満洲国時期東北作家の日本における翻訳活動」(『現代中国』86号、2012)等でもすでに指摘している。しかし本研究によって『華毎』同人グループの翻訳活動の全貌が明らかになったことにより、彼らの活動の全体の中に位置づけることができた。

(2) 梅娘のルポルタージュ作品の翻訳

梅娘が訳したルポルタージュ作品は、長谷健「満洲でみた子供(中国語題:在満洲所見的孩子)」、小田嶽夫「沃野と快速車(日本底延長?)」、吉屋信子「満洲大陸の土に生くる人々(曠野上的人們)」、岡田禎子「満洲紀行・車窓風景(寄自北満之旅)」の4篇である。これらの原作はいずれも日本人作家の満洲国訪問の際の記録で、基本的には日本による「満洲国建設」を慶賀し、「日満協和」の実現を叫んだものである。しかしその一方で政治から離れ、満洲国の独特の風光や豊かな資源を讃え

る記述も多く、必ずしも当局の方針に沿ったものに限らなかった。例えば、日韓併合に不満をもち満洲国に移住した朝鮮人に対し、その気骨を称賛する記述や、満洲国で目にした日満両国の子供たちについて、彼らが2か国間で習慣も教養も大きく異なり、差別も根強く存在する現状に愕然とし、満洲国において「日満協和」がいかに難しいか、その実情を伝えるものもある。以上のようにこれらルポルタージュには、日本人作家たちの率直な感想が多々述べられており、おそらく梅娘はこれらの作品を翻訳することで、同時代の日本作家が満洲国へどのようなまなざしを向けているかを紹介する意図があったのだと思われる。

考 察

本研究によって、梅娘ら『華毎』同人による翻訳活動の全体像をとらえることに成功し、彼らが厳しい日本の統制下にあつて連携しあい、検閲に抵触しない形で満洲国や日本占領下の華北に通じるメッセージを発信したということを明らかにした。これにより占領下の地域において外国文学の翻訳や紹介という形で政治を語ることがあったという事実を証明したのである。また本研究の過程で、梅娘が『大同報』で数々の創作作品を発表していたことを発見しており、これについては今後の研究で

取り上げていきたいと考えている。

謝 辞

本研究を進めるにあたっては、公益財団法人三島海雲記念財団による平成25年度学術研究助成を賜りました。助成により膨大な量の資料収集、より精密な研究・調査を実施することができ、また海外での成果発表も可能となりました。ここに厚くお礼申し上げます。

文 献

- 1) E. M. Gunn: Unwelcome Muse—Chinese Literature in Shanghai and Peking, 1937–1945, Columbia University Press, 1980.
- 2) 馮為群他編：東北淪陥時期文学国際学術研究会論文集，瀋陽出版社，1992.
- 3) 岡田英樹：文学にみる「満洲国」の位相，研文出版，2000.
- 4) 杉野要吉編：交争する中国文学と日本文学，三元社，2000.
- 5) 永嶺重敏：モダン都市の読書空間，日本エディタースクール出版部，2001.
- 6) 岸陽子：中国知識人の百年：文学の視座から，早稲田大学出版部，2004.
- 7) 張泉：抗戦時期的華北文学，貴州教育出版社，2005.
- 8) 張泉：中国東北文化研究の広場，1，51–58，2007.
- 9) 岡田英樹：中国東北文化研究の広場，2，49–63，2009.
- 10) 岡田英樹：続 文学にみる「満洲国」の位相，研文出版，2013.